

# 中国民間演劇の現状

## 紹興の蓮花落・鸚哥班・宝巻を中心に

磯部 祐子\*

### 要旨

紹興における民間演劇の再興について、2004年3月と9月に調査を行った。その結果、今日の民間演劇には、春の「祈福祭祀」、秋の「攘災祭祀」という演劇上演に絡む慣例の差異は見られなくなり、縁起を求めて、一年中神誕演劇が催される地域（紹興市袍江工業地区）さえ生まれていることが確認できた。人々は経済的な豊かさへの感謝と更なる富の達成を民間演劇上演に込めているのである。

また、この地域では、少人数の俳優によって演じられる、蓮花落・鸚哥班・宝巻などの劇種が最も受け入れられているが、その背景としては、蓮花落・鸚哥班の場合、劇団招請の費用の寡少さ、劇目の豊富さ、内容の親しみやすさ（観客と俳優が呼応し得るか否か）、ユーモアとそれによってもたらされるカタルシスの有無、俳優のレベルの向上などが指摘できる。一方、宝巻については、かつての伝統への執着がその背景にあると同時に、劇団招請のための費用が比較的寡少であることはいわずもがな、宣巻（宝巻上演）によってもたらされるだろう平安や富裕への期待をその上演に見ることができる。

キーワード：民間演劇 紹興 蓮花落 鸚哥班 宝巻

### 1：はじめに

小論は、2004年の紹興地区の民間演劇の調査に基づき、蓮花落・鸚哥班と宝巻の上演状況について報告し、考察を加えるものである。

筆者は、2003年秋の民間演劇再興に関する第一回の調査（注1）に続き、2004年春（3月16日～18日）及び2004年初秋（9月20日～24日）の2度に亘り紹興の民間演劇の調査を行った。春秋の2回に分けて当地に足を運んだのは、同一地域内で春と秋の季節による上演の差異、すなわちかつての春の「祈福祭祀」、秋の「攘災祭祀」という演劇上演に絡む慣例の差異が、文革を経てどのように推移変容したかについて調査し、民間演劇上演と宗教の今日的状況を明らかにしようと意図したからである。調査の過程で、当地では少人数の俳優によって演じられる、蓮花落・鸚哥班・宝巻などの劇種が、最も人気のあることを知った。今回の報告は、主に、紹興における蓮花落・鸚哥班・宝巻の上演状況を通して、農村における人々の演劇観について考察を加えたい。

### 2：民間演劇の性格

民間演劇とは、中華人民共和国の文化局（それが中央の管轄であれ、地方の管轄であれ）の指導下に編成されている劇団が上演する文化局系統の演劇に対立する概念である。つまり、民間演劇とは、農村などの廟や草台などの臨時舞台において、主に文化局など政府機関の指導下に所属しない人々によって編成されたグループや劇団が自主的に上演する演劇と定義する。

今日、民間演劇の性格は、昨年来の調査から、その主催者によって、主に3つに大別できるように思われる。

それは、

村落住民大半の醸金による定期開催の神誕演劇

裕福な「老板」の主催による寿誕演劇

任意の地域住民の醸金による不定期開催の還願演劇

である。

---

\* 地域ビジネス学科

ただ、村落住民大半の醸金による定期開催の神誕演劇、といっても、かつてのように村落に宗族地主などが存在することはほとんどなく、神誕演劇開催の中心的人物は社廟の管理者であったり、村落のまとめ役のような人物であったりする。またその権限の及ぶ範囲もさほど広くなく、そのため村落の経済状況が演劇上演の定期的性に微妙に影響すると思われる。以下に、まず如上の3分類に従って、調査の概要を記す。

### 3：2004年3月の調査から

#### 1) 樊江郷枯橋村の還願演劇 (写真1)

日時： 2004年3月16日  
 調査地点： 紹興県皋埠鎮樊江郷枯橋村（紹興市の中心より東方に10キロばかり）  
 上演目的： 還願（願ほどき）と祈願  
 祭祀神： 大平菩薩  
 主催者： 紹興の町で洋服生地を商う40代半ばの人物  
 演者： 沈宝賢（蓮花落）  
 演目： 慶寿、沈万山、阿必大回娘家

枯橋村は、紹興駅から鉄道の蕭甬線沿いに東方にある。ここ一帯は、広い耕地面積を有す豊かな村である。村は全村200余戸、900人の人口を擁している。水稻を主としているが、大半は近隣に働きに行っている。また淡水真珠の養殖業者も大勢いる。主催者であるその村の住民の上演目的は願解きである。このような芝居上演は3回目になる。1度目は1997年、息子が浙江大学に入った時。2度目は2001年、無事大学院に合格したことを祝って、そして今回は無事の卒業祝いと将来の安寧を願って開くという。

「阿必大回娘家」は、嫁姑との不和の話。言葉に通俗表現が多く、農村の生活や心情に基づき農村での家庭内の姑と嫁が巻き起こす騒動を如実に表している。喜怒哀楽が聞く人々を楽しませる。諧謔滑稽味が濃厚である。

#### 2) 趙家畝の寿誕演劇 (写真2,3)

日時： 2004年3月17日  
 調査地点： 紹興県福全鎮趙家畝（紹興市の中心から西南6キロの地点）  
 上演目的： 慶寿（99歳の老母の祝い）  
 祭祀神： 太平菩薩  
 主催者： 老母の次男を代表に全ての子どもと孫  
 演者： 十三齡童ひきいる臨時の紹劇団45人  
 演目： 「包公打鸞駕」（又「柯落帽風」と称す）

趙家畝は紹興の中心を東に20分ほど車を走らせた福全鎮に位置する（注2）。今日では染色工場が林立し、紹興市周辺の中でも比較的裕福な農村である。

趙家畝は、南宋の詩人陸游（1125-1209）が慶元元年（1195年）にこの村を通りかかって一首の詩を作ったことでも有名。その詩には、この地における当時の演芸の流行ぶりが記されている。

その村で、「做九（99才）」を祝う大寿戯が繰り広げられていた。全村およそ1800人の村に130卓、1300人の料理が並べられ、大々的な紹興劇が演じられる。招かれた演員と楽団員は併せて45人、午後1時40分開始の出し物は「包公打鸞駕」である。

「包公打鸞駕」の物語は、以下の通り。乞丐の范仲華は、陳州の橋頭で100個の銅板で一人の母を買い求め、二人は助け合って生きてきた。ある日、包公が陳州で食料を施している時、嵐が吹いて帽子が飛んでいった。包公の命令に従った護衛兵がその帽子の落下先を捜すと、范仲華のところであった。そのことを懲らしめようとしたが、范仲華は親孝行ものだ、という評判を聞いた包公は、彼を解き放ち、おまけに銀十両をもたせた。范仲華の帰宅後、そのことを知った母親は、自分には18年にもわたる冤罪があるので包公に晴らしてもらいたいという。果たして、包公の来訪によって母親は時の皇帝の生みの親であることが判明し、母と范仲華は皇居に召される。

時代は宋の仁宗に設定されていて、親孝行が称えられ、諧謔が随所にはめこまれた芝居である。

### 3) 趙家畝の還願宣巻 (写真4,5,6)

日時： 2000年3月18日  
調査地点： 浙江省紹興市福全鎮趙家畝  
上演目的： 還願（願ほどき）と祈願  
祭祀神： 弥勒殿菩薩  
主催者： 仏教徒である60歳の女性  
演者： 容山村俞邦民が主催する「新春班」というグループ  
メンバー (男) 俞邦民 63 音楽 (男) 帶愛泉 59 老生  
(女) 沈裕娟 36 小生 (女) 沈利珍 42 小生  
演者4人は 鑿、喇叭、噴呐、二胡、小木魚、板胡、篤鼓などの楽器を担当することを兼ねる。

## 4: 2004年9月の調査

### 1) 洋瀆村興隆廟の神誕演劇 (写真7)

日時： 2000年9月20日  
調査地点： 紹興市越城区靈芝鎮洋瀆村興隆廟（紹興市の北に位置する）  
(洋瀆村は総戸数280戸、総人口790人。2001年より、工業に伴い、村全体に耕地がなくなり、農業従事者がいなくなった。四周は工業・商業が盛んで道路も発達しており、基本的に都市型の村である。生活水準は高く、一戸あたりの住居空間も広い。98%の農民が、かつてとは異なり、自宅にトイレを備えている)

上演目的： 神誕（興隆廟佛光普照）  
祭祀神： 佛光普照（興隆廟には、ほかに弥勒佛 阿弥陀 韋駄 華陀菩薩 観音 天分元帥 南海観音 四老相公 地目娘々 眼光娘々 九天新元母 地藏王菩薩などが配される）  
主催者： 村の構成員の大半  
演者： 善正越劇団（玉善君・龔正英夫妻を中心とする劇団、妻の王善君はもと越劇団員、夫の龔正英は戯曲愛好家）  
劇目： 「百花台（莫貴は、紹興人で、二男二女をもつ人物。貧しい役人である揚州の李文敬の父は、莫貴と同年に任官したが、皇糧を使ったという冤罪を蒙り、官を辞し、帰郷する。そのとき、莫貴は、娘の莫玉英を李の息子の李文敬に嫁がせることにする。やがて李の父母が世を去ると、火事などに見舞われ李は零落して紹興に来る。莫は李の貧しい身なりを見ると結婚の約束を反古にする。李文敬は、莫に自分に学問をさせ、任官するまで援助してほしいと頼むが断られる。李文敬はそこで身売りの証文を書いて莫杰と改名し、莫家の二人の息子に仕える。その後、二人の息子は、莫杰が姉の夫と知る。一方、長女の夫はそのことを知り、彼の身分の卑しさを嫌い、揚州李と改名させ、百花台の掃除を命じ、学問の道を閉ざす。莫玉英はその百花台で李を知り、夫婦と認め合う。2月18日花神の誕生日、一家が花神廟に出かけている時、病と偽った玉英と李は密会を果たす。それに気づいた長姉は途中で帰宅する。莫貴は玉英を責めて殺し荒山に埋めるが大霜に生き返る。李もその後状元となり二人は結ばれる。)

この劇は、横6m、奥行き5mの新しく建てられたばかりの戲台で上演された。戲台に対峙する興隆廟の入口には石碑があり、この廟を建立するために醸出した者の名が2万元を醸出した人物を筆頭に、60元の醸出者、労働力の提供者に至る百名ほどの名が記されている。建立には5万元、戲台建築には6万元を用いたという。

## 2)木柵張家葑村の神誕演劇(写真8)

日時： 9月21日 午後(小雨 後 大雨)  
 調査地点： 紹興県蘭亭鎮木柵張家葑村(紹興市から西南に7キロぐらい)  
 上演目的： 神誕  
 祭祀神： 南征大菩薩  
 主催者： 代表は南征大菩薩の生まれ変わりと称する60歳の女性。その他村民の自由意志により費用を醸出  
 演者： 紹興大班、班員は全部で35人(うち楽隊6人)  
 演目： 「包公打鑾駕」

開演前に、爆竹が鳴らされ、「請寿」の後、白い面をつけた武財神が元宝に見立てたキャンディをもって登場、観客に撒く。

張家葑では、今年すでに十二回も劇が上演されているが、紹劇の上演は僅かに一回だけ。蓮花落や鸚哥班を多く招くという。

戯台前には、念仏の老女たちが10ほどのグループを作って、河に面して河と平行に置かれた菜場(野菜市場)のテーブルの両側に並んでいる(写真9)。午前中は朝六時半から十一時まで、午後は十二時半から六時まで、一人一日12元の報酬で念仏をする。老女たちは、これといった仕事がないので、念仏をすることによって家計のたしにすることができる。一人の老女は、「樹上開花、嘴上開花(木には花が咲くように、口では念仏の花を咲かす)」だけだ、と笑った。九人あるいは十二人が一班となり、それぞれ代表者がいてその班を取りしきり、念仏して近隣の村々を回っている、という。

この主催者は南征大菩薩の「替身(生まれ変わり)」であると称する。他に費用を負担した何人かは、公安局公務員になったこと、妻を娶れたこと、健康が回復したことの「還願(願解き)」であるという。宗族が祭りを主催するのは異なり、偶然の宗教的目覚めのある人物によって、祀りが取りしきられる一例である。

近くの家には設けられた祭壇には多くの紙銭(元宝型)が祀られていた。また多くの米桶には、紙が張られ、その上には、例えば「米桶一只内有佛包拾張奉敬南鎮爺爺納収 公元2004年農曆八月吉日 保佑 四季平安 身体健康 紹興県蘭亭鎮 張家葑 信士張宝康」(写真10)などと記されていて、「四季平安 身体健康」(家内安全、無病息災)が祈願されていた。

## 3)紹興袍江工業地区章家縷の神誕演劇(写真11)

日時： 2004年9月22日  
 調査地点： 紹興袍江工業地区章家縷  
 上演目的： 神誕演劇  
 祭祀神： 天皇地皇菩薩(天や地を取り締まる神だと説明を受けた)  
 主催者： 李(37歳男性)、王(36歳女性)という村の男女。工場勤務、この奉納芝居を主催するに当たっては、自分自身が費用の一部を醸出するだけでなく、村民の醸金も募る。  
 演者： 宋小青(鸚哥班 退職者)、教え子(女)、宋小青の友人(もと越劇俳優)  
 演目： 「阿必大回娘家」、「巧姻縁」

「阿必大回娘家」は、前述のように嫁姑の不和の物語。「巧姻縁」は、女性は口が裂けていて、男性は亀背というカップルの話。寺にお参りに行った際に愛し合い結婚する。結婚後、家の年配の者たちは新郎の亀背が気になる。しかし新郎は言った。「花嫁は口が裂けていて、自分は亀背だ。お互い欠点があるではないか。そんな人間が一緒になるのに何の不都合があるのか」と(写真12)。外貌の欠陥を誇張して表現、その欠陥を嘲笑しながらも人間の強さを表現したものの。

ほかに主催者の食堂では、宝巻の上演が同時進行で行われていた。演者は、40歳前後の男女4人(二胡、歌 三人<そのうち一人が木魚、一人が銅鑼を兼ねる>)。また、もう一室では12人の年配の女性たちが念仏を唱えながら紙銭を折っていて、その門前には、紙銭で飾られた馬

と車が置かれていた（写真13）。

紙製の馬については、同行の中国研究者も初めて目にしたというが、田仲一成『中国演劇史』に引く乾隆53年（1788）の「福主晋石王廟会記」には紙製の馬のことが見える（注3）。

「晋石王……神は六月二十〔日〕に誕す。本族に老会と新会とあり。期に先だちて金を劇〔釀〕め、袍馬を辨じ、戯を演じて慶祝す。時に修め時に廃するに因り、以て久しきを垂ること難し。乾隆戊辰〔十三年〕、族衆穀四十石を輸し、次年に銀に易え息を生ぜしむ。庚午〔十五年〕に至り、共に銀三十両を湊む。送りて祠中の毎年の袍馬と戯の資に帰す」

「袍」が「誕生祝いに神に贈る紙製の衣装」で、ここでいう「袍馬」の「馬」が「神に贈る紙製の神馬」を指すという。

今回実見した紙馬は、銀紙で折った元宝が一面に貼られたもので、その傍らに、やはり元宝で飾られた車が時世を反映するかのように置かれていた。

主催者に抛れば、この村では、今年だけで、すでに、2月（嵊県越劇団）、3月（沈宝賢、蓮花落）、5月（金国良、蓮花落）、9月（宋小青、鸚哥班）の4回、神誕演劇を催したと言う。この地域が紹興を代表する工業地区として発達し、経済的安定を勝ち取ったことにより、頻繁の上演が可能となった。主催者は、また、数人の俳優を招くのにはさほどの費用は要らない、数千元あればすべて賄えると言い、村の人々も望んでいると言う。年若い赤ん坊を抱いた女性は、蓮花落や鸚哥班が好きだと言う。心から笑え、心から同調できる内容なのだそうだ。演者である宋小青も、蓮花落と鸚哥班が最も多く招請があり、自身昨年は20箇所以上に出向いたと言う。

それでは、蓮花落と鸚哥班が人気を博すその理由について、以下に考察し、併せて庶民の戯曲観についても考えてみよう。

## 5：蓮花落の衰退と隆盛

紹興の「戯曲文化」は、大きく「紹興戯劇」と「紹興曲芸」に分かれ、前者には、紹劇・越劇・新昌調腔、諸暨乱弾、紹興灘簧！目連戯、孟姜戯があり、後者には紹興蓮花落、紹興詞調、紹興平湖調、紹興宣巻が含まれる。「曲芸」とは、いわば、地方色豊かで大衆的なものを指すようである。「曲芸」の蓮花落は、浙江蕭山、杭州、嘉興や紹興などで流行し、土地のことばと地方の民謡が合わさっているのがその特徴の一つである（注4）。

起源はかなり古く、宋代にはすでに乞者が歌っていたことが、南宋の人・釈普済の『五灯会元』に記載されている。元雜劇「李亜仙花酒曲江池」、明雜劇「曲江池」などにも蓮花落の記載があり、明代伝奇「繡襦記」の中には「四季蓮花落」を歌っている挿絵が載っている。この「繡襦記」の主人公は蓮花落の歌手である。主人公鄭元和は役人の息子で、上京し試験に赴こうとして、名妓李亜仙に迷い、金を使い果たし家族からも逐い出されるが、一人の乞食について「蓮花落」を学び生計を立てる。しかしそれを憐れんだ李亜仙の助けで再度受験に望み、状元に合格して父親とも団円するというもの。物語自体は、唐代伝奇小説「李娃伝」（白行簡）に源を発する。

筆者自身の調査のうち、紹興蓮花落の上演を初めて見たのは、2004年3月16日、紹興県皋埠鎮樊江郷枯橋村で沈宝賢が演じるそれであった。沈宝賢氏は、紹興蓮花落のCD「日月雌雄杯」（第1集）第3集（浙江文芸音像出版社出版）と携帯電話の番号が記された名刺があることが示すように、浙江省の曲芸大会で一等に輝いた人物で、この地方では著名な俳優であることが分かる。

まず、長い長い「吉利話（縁起祝い）」が歌われ、ついで「沈万山」と「阿必大回娘家」が演じられた。この「吉利話（縁起祝い）」からは、その内容がいかに聴衆の生活に根ざしたものであるかを知ることができる。以下に、記録した「吉利話（縁起祝い）」を記す。

〔引子〕導入部分）

八仙飄海紫雲飛，福星身上穿綠衣，福、祿、壽三星赴蟠桃，壽公壽婆笑嘻嘻。

（八仙海を渡って紫雲飛び、福星身に緑衣を穿、福、祿、壽三星蟠桃に赴き、壽公壽婆はニコニコと）

## [唱詞] (歌)

三十三層天上天，白云上面出神仙，人仙本是凡人做，只怕凡人心勿堅；倘若凡人心來堅，个个凡人好成仙。皇母娘娘做大寿，众位大仙去赴宴，要請那，文財神，武財神，文財神搖錢樹來搖一搖，金銀財寶掉下木佬佬，啥人來接牢？×××人肯起早，身兜米兜牢，一生一世用勿掉，武財神手捧一只大元宝，東走走西瞧瞧，×××人屋裡來走到，堂前中央擺着金元宝，耶家人家才逍遙。

(三十三層天上天、白雲から神仙出でて。人仙は本これ凡人なり、恐れるは凡人の心堅く勿からんを。もし凡人の心堅ければ、個々の凡人よく仙人に成らん。皇母娘娘は大寿となり、あまたの大仙宴に赴く。文財神に武財神。文財神は金のなる木を揺らしつつ、金銀財宝たんまりもたらす。手に入れんや、〇〇は早起きをいとわぬ。ふろしきでしっかり包み、一生運用いても失わざらん。武財神は手に大元宝を持ち、東に走り、西を覗う。〇〇の家に到り、母屋の前には金の元宝、その家の人は思いのままに)

呂純陽：上八洞神仙要請到，呂純陽頭上戴起瓦楞帽，身上穿起八卦袍，肩背一把烏龍鞘，所有妖魔都斬掉，各村各戶太平保。

(八洞に神仙を招こう。呂純陽頭上に瓦楞帽を載せ、身には八卦袍、肩には烏龍の鞘、あらゆる妖魔も皆斬り殺し、村々家々みな太平)

藍采和：肩背药梅仙草，七七四十九个山头都掏到，掏来一枝九世还魂灵芝草，×××人屋裡來邀到，保佑耶，大小人毛病都去消，身体健康乐陶陶。

(肩に薬梅をかついで仙草をさがし、49の山皆歩く。九世還魂の靈芝を探しあて、〇〇さん宅に邀く。老いも若きも病い癒え丈夫な体でありますように)

何仙姑：手提花籃浪滔滔，八仙队里相貌要算伊頂搵好，保佑×××人噉屋里头小孩相貌个个有介好，人家屋裡真逍遙。

(手に花籠をひっさげて、八仙中の超美人。〇〇さん宅の子どもたち、容貌際立ち思い通りになりますように)

李铁拐：左脚高来右脚跳，肩背葫芦放毫光，放出毫光万丈高，×××人噉屋裡來照到，照得耶人家屋裡金光万道。

(左足長く右足つま立ち、肩に瓢箪ぶらさげて、光を放つどこまでも。〇〇さん宅照らし当て、家中に満たす輝かしい道)

韩湘子：肩背玉笛凤凰箫，吹出山歌乐陶陶，吹得×××人噉屋里头，一年四季不准哭只准笑，耶家人家多少好。

(肩に玉笛ぶらさげて、山歌を吹いてのびやかに。〇〇さん宅に聞こえ来て、一年四季笑み満つる。なんとまあすばらしや)

汉钟离：倒挂胡须盘项颈，肚皮拖落半天高，一手拿了芭蕉扇，一手托了一颗好仙桃，伊的福气有介好，芭蕉树下困晏觉，保佑×××人噉大人福气也有这般好。

(ひげは道をめぐらして、腹は空に突き出して。片手に芭蕉扇、右手に仙桃。福気あり、芭蕉の下で昼寝せん。〇〇さん宅に福の神が来ますように)

张果老：倒骑驴子呵呵笑，鱼鼓签筒拿得牢，上也敲，下也敲，敲得×××人噉屋里头，楼上楼下堆满金元宝。

(ロバにまたがり後ろ向き。魚鼓竹筒を手にもって、いつもパチパチ叩いてる。〇〇さん宅にパチパチと、叩けば元宝山になる)

曹国舅：头上戴起乌纱帽，身上穿起紫罗袍，手拿云板云端敲，敲得天下百姓呵呵笑，上八洞神仙都請到，皇母娘娘做大寿，众大神明都請到：包爷爷菩萨請到，张龙、赵虎斩魔妖；关帝菩萨請到，周仓、关平背大刀；张神菩萨請到，手捧一只金元宝；黄老相公請到，五谷丰收传捷报；天医、华陀請到，所有毛病都医好；眼光娘娘請到，眼目清亮太平保；沈万山菩萨請到，拨诺堂前中央聚宝盆來擺好；五岳爷爷請到，斗母娘娘請到，地母娘娘請到，子母娘娘請到，南海观音請到，千手观音請到，山东李娘娘請到，曹娥孝女請到，文昌王菩萨請到，五猖爷爷請到，交通菩萨請到，阿运菩萨請到，华陀菩萨請到，增福增寿菩萨請到，当方土地菩萨請到，城隍爷爷請到，酒仙菩萨請到，风、雨、雷、电菩萨請到，所有

菩薩来请到，寿堂里头闹嚷嚷。(頭上に烏紗帽を載せ、身には紫羅袍をまとう。手には雲板打ち鳴らし、世の人々も笑い出す。天上八仙みな招き、皇母娘娘の年祝い。あまたの神も招き呼ぶ。包公菩薩がご来臨、張龍、趙虎が妖魔斬る。關帝菩薩がご来臨、周倉、關平は大刀かつぐ。張神菩薩がご来臨、手には金元宝をもつ。黄老相公がご来臨、五穀豊穡のお知らせだ。天医、華陀がご来臨、あらゆる病みな治す。眼光娘娘がご来臨、視力回復家内安全。沈万山菩薩がご来臨、お堂の前に宝の盆を並べ終ゆ。玉嶽爺爺がご来臨、斗母娘娘がご来臨、地母娘娘がご来臨、子母娘娘がご来臨、南海觀音がご来臨、千手觀音がご来臨、山東李娘娘がご来臨、曹娥孝女がご来臨、文昌王菩薩がご来臨、玉嶽爺爺がご来臨、交通菩薩がご来臨、阿運菩薩がご来臨、華陀菩薩がご来臨、増福増寿菩薩がご来臨、当方土地菩薩がご来臨、城隍爺爺がご来臨、酒仙菩薩がご来臨、風、雨、雷、電菩薩がご来臨、あらゆる神を招き呼び、式場の中、にぎにぎし)

[白口]

南方小仙、你因何偷尝蟠桃？尝了蟠桃有何好处？

南方小仙：启禀王母娘娘，尝了蟠桃，有三千年开花，三千年结果，三千年成熟，一千年有味，合并万万年。吃了仙桃仙果，有长生不老，不老长生。

王母：既然如此，把仙桃仙果分给天下百姓，长生不老，永世太平。(擲糖果倒台下)

保佑保佑多保佑，保佑×××屋里头的活过老寿星，女的活过观世音，出门人路上保太平，读书人个个步步高升，名牌大学稳考进，出国留学稳写定，还要作中央干部接班人，保佑大姑娘捕龙绣凤歪聪明；保佑新婚夫妻早生贵子跳龙门，保佑保佑多保佑，×××人啦屋里头，吃甯愁，用甯愁，五路财神管门口，阿运菩萨踉得走，沈万山家保益搬进屋里头，出门勿用走，轿车歇到门口头，房屋造起六层楼，电梯通高楼，电话通上头，出门保姆跟着走，屋里头装潢考究，大理石铺地下，扬子白玉镶高头；屋里头，话得出的东西样样有，上半年吃啤酒，下半年吃老酒，人客来了吃茅台酒，灶头间，酱鸡酱鸭酱白狗(鹅)，腊鸡腊鸭腊猪头，金华火腿原只头，大螺蛳青(鱼名)全是油，保佑耶一生一世勿用愁，福也有，寿也有，寿数活过一白九，一百九十岁勿够头，两百念岁做大寿，下次欢欢喜喜吃寿酒。

(南方小仙、蟠桃盗み食したのは何故に？蟠桃に何か効能が？)

南方小仙：王母娘娘様に申します。蟠桃を食べたなら、三千年間花開き、三千年間実を結び、三千年間実が熟し、一千年間匂いあり、それらを合わせて一万年。仙桃仙果を食べたなら、長生き不老おすみつき。

王母：かくあれば、仙桃仙果を万民に分け、不老長生にして、永遠に太平にせん。(ここで聴衆に飴を撒く)

守りあれ、守りあれ、〇〇宅の男たち、長く生きて寿星を追いこし、女たち、長く生きて観音を追いこせ。外に出たらつつがなく、勉強しては向上し、有名大学合格し、外国留学はほしいまま、そして中央の後継者。守りあれ、手先器用で頭良く、守りあれ、新婚夫婦に男の子、生まれた後は出世せよ。守りあれ、〇〇宅を守りあれ、食べる金、用いる金に愁いなく、五路財神は玄関を守り、阿運菩薩とともに行く。沈万山の宝の盆は家におき、外出時は用いるな。車は玄関前に置き、家は六階建てのもの。エレベーターも設らえて、電話も部屋まで引き込んで、外出時は家政婦連れて。家の内装すばらしく、下は大理石の床を敷き、上は揚子の白玉はめて。家中に満つ世界中のもの。ビールを飲んで老酒を飲んで、客が来た時マオタイ飲んで、台所には醤油漬けの鳥肉、あひる肉、ガチョウ肉、燻製鶏に燻製鴨、そして燻製豚もある。金華のハムは一かたまり、螺蛳青は油がたっぷり。守りあれ、一生運金に不自由なく、福あり、寿あり。齡は190を越え、いやはや190で終わらずに、200歳の祝いをし、次回は楽しく祝い酒。)

上記のように、八仙が一人ずつ登場し、それぞれがめでたい兆しを現していき、最後にはあまたの神様の登場となる。その縁起祝いは、人々がこうあってほしいという理想そのものである。

そして、ついで演じられるのは、縁起祝いの中に登場する「沈万山」の物語である。この物語は極めて縁起がいい。沈万山という夫婦には齡40になっても子どもがいなかった。そこで仲秋の名月に子どもを授けてほしいと願をかけると、嫦娥がそれに同情し、玉帝に上奏した。果たして妊娠がかなうが、22箇月目

に生まれたのは不思議な球状の物体で、聞けば人の手であった。

沈万山夫婦は漁を生業としていたが、その球は川の中に転がり落ち、やがて「娶宝盆」を掴んで戻る。朝奉先生（鑑識眼のある質屋）にこの手は何かとたずねると、「拿宝手（宝を掴む手）」という。確かに「娶宝盆」の中に入っていた18個のマキガイを捨てると、そのマキガイが18人の羅漢に姿を変えて天に舞い昇った。「娶宝盆」を家に持って帰り、餌を載せて鶏や鴨に差し出すや、その餌を食べた鶏や鴨はすぐに太り、餌は少しも減らない。この「娶宝盆」、実は、不用で捨てたものをよいものに生まれ変わらせ、よいものはその数をさらに満たすという不思議な盆であった。やがて夫婦は恵まれた生活を送ることになるというもの。「娶宝盆」は中国版「打ち出の小槌」といったところである。

もう一話、「阿必大回娘家」は姑が二番目の嫁をいびる話。嬌嬌（父の姉妹）の一人がこの嫁を手をつくして連れ帰そうとする。その際の姑と嬌嬌のユーモア溢れることばの応酬が中心である。元曲「救風塵」との類似性も垣間見ることができる。

「沈万山」では、民衆の願望が「娶宝盆」に託されていると見ることができる。演者が唱の最後に、この村の人々も「娶宝盆」を手にするようにと歌うことがそれを如実に示している。また、「阿必大回娘家」は、農村の嫁と姑の関係を描いたもので、低俗ながら実際生活に立脚し、思わず笑いを誘わせられる演目のようである。笑いを誘う間合いをたくみに考えながら、観客誰一人をも倦きさせることなく演じていた。

また、歌には、作品の流れに応じて自由に紹劇、越劇、宝巻などの調べを導入していく。こうした臨機応変に演じ得る「流動性」は、民間演劇の大きな特徴である。この「流動性」は、配役の選択についても指摘できる。誰に演じてほしいかは、「領班人（座長）」がその日の上演目的やメンバーの都合を調整しながら決定するのである。

省に所属したり、市に所属したりする公的な劇団は、低い賃金であるけれども安定した生活が保障される。しかし演者は固定され、歌う調べにも劇種に応じた規則があった。こうした固定性や規則性に相反する特徴を、今日の民間演劇は備えている。演者も必要に応じてメンバーを替え、曲調も場面に応じて他劇種から借用することができる。このことが、今日の民間演劇再興における、その背景・事情として存在しているのではないだろうか。「演者と観客との呼応」という、演劇本来の姿が、規則に拘泥しない民間演劇では容易になし得るのである。

紹興蓮花落は、紹興市と紹興県で併せて10ほどの劇団があるが、どの劇団もこの時期ほぼ連日の招請があるという事実は、地方劇形成期の姿が再来していることを意味している。

## 5：鸚哥班

鸚哥班は、清の乾隆・嘉靖ごろに、山陰・会稽方面に流行し、一般には、一旦一丑で演じられた小規模の芝居で、巷の話題を挟み込みながら、人々の生活や時世を風刺したり、男女の間の出来事をユーモアに演じたりする劇種であり、紹興灘簧ともよばれる。その面白さから「鸚哥班をみたら、男は野良仕事がいやになり、女は食事の準備ができないほどだ」といわれ、人々に人気を博してきた。しかし、その風刺性と人気ゆえに、文革によってこの劇種と俳優は大きな辛苦を味わうことになる。

今回、今日の鸚哥班の救世主とも言っよい宋小青の上演を目にする機会を得た。彼女は今最も人気のある鸚哥班の俳優である。「紹興日報 2004年7月22日」と宋小青自身からの聞き取りに拠れば、ここまでの道筋は決して平坦ではなかった。宋小青は、1961年16歳の時に紹興曲芸訓練班に入り、3年の訓練のあと鸚哥班の俳優になった。しかし、文革中の1970年に紹興曲芸団は解散させられ、劇本もほとんどが焼かれた、という。機械の部品工場で8年間板金工になり、1978年再び文化局に配置転換されるも、景気が良くなく1983年に再度解散し、やむなく古本屋の店員や事務員を行って、14年後に退職する。この間、紹興では鸚哥班が演じられることはなかった。退職後、経済も活況を呈した1999年から、劇本の発掘、あるいはかつての記憶に頼り劇本の整理を試み、「胡子哥」「阿必大」「売青炭」「前見姑」「後見姑」「相罵本」「呂洞賓三戲白牡丹」などを書き上げた。また鸚哥班の消滅を恐れ、街の文化ステーションで、鸚哥班の人材育成にも着手し始めた。

宋小青の上演は、9月22日、紹興県蘭門鎮石泗村當林において実施された。天皇地皇を祝う神



誕演劇の観衆には、若い女性も多く含まれていた。身近な内容に親近感を覚えるからであろう。「巧姻縁」は、前述のように、女性は口が裂けていて、男性は亀背というカップルの話。その障害を持つ外貌の戯画化されていることに驚くが、劇中の「花嫁は口が裂けていて、誰もが欠点があるではないか。そんな人間が一緒になるのに何の不都合があるのか」、と生きることの強さを表現する新郎に、多くの観衆は拍手を送っていた。

「阿必大」は、前掲「蓮花落」の代表的演目でもあって、嫁と姑のよくありそうな関係が描かれる。俳優は、劇中、若い嫁が難儀する場面では、若い女性に同調を求めるようなしぐさも見せ、反対に、姑に教訓じみたことを言う場面では、年配の女性たちに目を遣り、笑いを誘う。このようにして、俳優と観衆との呼応が可能になる。

宋小青は、鸚哥班の魅力と人気の秘密を、俳優が少ないので、主催者が小額の経費で済むこと、劇目が割合多いこと、観衆に分かりやすい内容であること(典故や歴史的知識が要らない)、ユーモアに富むこと、教訓的色彩も加味されていること、の5点を挙げている。

今年すでに200回ほどの上演回数をこなしたという宋小青の演技からは、鸚哥班が受け入れられていること、演じることの喜びが伝わったと同時に、人々が戯曲に求めているものの一つは、実生活から出発し、劇中にその生活を観てカタルシスを感じるのではないかと、思わせられた。

また、宋小青の一連の行動は、戯曲史のなかで多くの劇種に消長があったが、その隆盛は、経済的背景、内容の面白さと同時に俳優そのものの魅力に負うことが多いことをも示唆する。

## 6：宝巻

紹興での宝巻の上演に関しては、その再興について幾度か報告した(注5)。今回は、3月18日、浙江省紹興市福全鎮趙家畝弥勒殿における宝巻上演、すなわち宣巻について考察した。私たちが訪ねたその日、弥勒殿には

### 「宣巻三状元

擇于农历二月廿八上午弥勒殿演唱

領班福全鎮下俞村俞邦民先生

由岱山于雅琴居士供奉

回向孙子鄒騰益好好学习天天向上

名列前茅 宏开党路

瀛湖龙会(筹)

党芦安养园主办(前掲写真4参照)

と記された赤い紙が貼ってあった。雅琴という女性が、その孫である鄒騰益の成績向上を望んで願いをかけていたところ、その甲斐あって願いが成就した。今回はその願ほどきと更なる成績向上を祈願して開催したものである。

施主は神牌を備えて、それに何度も拝礼をする。宣巻人はマイクロフォンをとりつけ、マイクの前で歌う。ボリュームを最大にして村中への宣巻も意図したものである。しかし、参加した人々が真剣に聞いているかどうかは疑わしい。そして、あまりにボリュームが大きく質も悪いマイクから聞こえてくるその歌は、多くの人が筋さえ理解できないのではないかと思えるほど劣悪な響きであった。

宣巻人は、あらかじめ提示した「1.天縁宝巻、2.三状元宝巻、3.双状元宝巻、4.双貴図宝巻、5.買水龍図宝巻、6.割麦龍図宝巻、7.買花龍図宝巻」(前掲写真5参照)などの宝巻から、本日の宣巻テキストの選択を施主に依頼したという。施主から選ばれていたのは「三状元宝巻」である。「三状元宝巻」は、嘉靖の時、江蘇省江陰県が舞台。施徳明という人が、八歳の息子(施文慶)一人を置いて死亡した。施文慶は病気で家財も使い切った。そのうち借金まで迫られ、全ての金を叔父に奪われるものの、通りがかりの師父に救われ教育も授けられる。やがて16歳になり、科挙試験に赴くが、途中、金を紛失する。しかしまた陸金栄という蘇州府の役人に助

けられ、陸の娘文換との結婚を請われる。式の後、試験のため上京。妻はその後一人の息子を産む。施文慶は苦難を経て状元になる。施文慶の母楊秀英も再婚し、二人の息子を産み、その後その息子二人も状元になるという話。

宣卷人からの聞き取りによれば、このグループは、蕭山地区及び皐埠、柯橋、福全、蘭亭、馬山、東浦などの地区を回っていて、その出身地である容山村附近は人口3000人に5つの宣卷グループがあり、古くからの伝統を引き継いでいるとのこと。喪事の時には道士が紹劇の調べで歌い、楽器は二胡と小篳鼓を主に用いるが、彼らは慶事や祈願事を担当するのがほとんどであるらしい。近年、紹興県柯橋は繊維工場によって地区全体が経済的に潤ってきて、慶寿戯を催す人が多くなり、招かれることも頻繁になったという。特に、陰暦の2月は招聘の声が最も多くかかる時節である。2月の「2」に重きを置いて、二人揃って長生きするようにとの意味を込めることによる。60歳の祝いには、一晚中子女らが長寿を祝う。多い時で12時間以上、昼から翌日の朝6時まで、あるいは朝6時から夜6時まで祝うという。

この弥勒殿での宣卷のほかに、9月22日、紹興県蘭門鎮石泗村當林（写真14）でも宣卷を耳にした。傍らで賑やかに鸚哥班が演じられているのに、なぜか宣卷も同時進行で行われている。マイクが2つ用意され、一方からは割合に高い調子の鸚哥班の声が流れ、一方からは低い調子の単調な宝卷調の響きが聞こえる。主催者に同時上演の理由を聞いた。彼女は、「熱鬧（にぎやか）」だから、と答えた。

この二つの例からは、「宣卷」再興には、形式的な行事の復活の面もあるのではないかと思われられた。宗教的な色彩が強く、縁起がいい「宝卷」を村中に響き渡らせることによって、演目「三状元」のでしに述べる「三状元宝卷初展開、諸位菩薩降臨来、善男信女虔誠聽、托福延寿保太平」という状況をもたらすことを期待しているのである。

## 7：まとめ

以上、短期間ではあったが、今日の紹興における民間演劇の再興について調査を行うことができた。その結果、民間演劇には、春の「祈福祭祀」、秋の「攘災祭祀」という演劇上演に絡む慣例の差異については、見られなくなったことが指摘できる。それどころか、縁起を求めて、多くの神誕演劇が年中催される地域（紹興市袍江工業地区）も生まれていた。人々は経済的な豊かさへの感謝と更なる富の追及を民間演劇上演にこめているのである。

また、この地域では、少人数の俳優によって演じられる、蓮花落・鸚哥班・宝卷などの劇種が、最も人気があるといえる。その背景については、蓮花落・鸚哥班の場合、劇団招請の費用の寡少さ、劇目の豊富さ、内容の親しみやすさ（観客と俳優が呼応し得るか否か）、ユーモアとそれによってもたらされるカタルシスの有無、俳優のレベルの向上などが指摘できよう。また、宣卷については、かつての伝統への執着がその背景にあると同時に、劇団招請のための費用が比較的寡少で済むことはいわずもがな、宣卷によってもたらされる平安や富裕への期待を求めていることをその上演に見ることができる。これらこそが、今日、地方の人々が民間演劇に求めるものなのであろう。

注釈

注1：「中国民間演劇の再燃」(高岡短期大学紀要 vol.19 p.159 170 2004.3)

注2：趙家堰は、南宋・陸游の詩「小船遊近村捨舟步歸」「斜陽古柳趙家莊 負鼓盲翁正作場 死後是非誰管得 滿村聽說蔡中郎」(斜陽を浴びた柳の古木の立つ、趙家莊の村。そこで、鼓を背負った盲目の老人が、いましも演芸の最中である。 思えば死んだらあとの評価は他人さま次第、誰が自分の意のままに動かせるものか。村じゅうの人たちは老人の物語に耳をかたむけている。一代の名士でありながら薄情者とされてしまった、あの蔡中郎の物語に。)にひく「趙家莊」である。詩中、趙家堰ではなく、趙家莊と記されているのは平仄及び押韻の必要からの改変であろう。

注3：田仲一成『中国演劇史』(東京大学出版社 1998)

注4：『紹興市志』第4冊(紹興市地方志編委員会編 1996年刊)参照。

注5：「生き続ける宝巻(上)」(「東方188号」p2~ p5 1996)

「生き続ける宝巻(下)」(「東方189号」p12~ p15 1996)

「今日之宝巻」(「中国学報第37巻」p55~ p62 1997)

「中国民間演劇の再燃」(高岡短期大学紀要 ,vol.19 p159~ p 170 2004)



(写真1) 皋埠鎮樊江郷で蓮花落を唱う沈宝賢



(写真2) 趙家畷で催された慶寿演劇



(写真3) 99歳の老母生誕を祝って設けられた宴席



(写真4) 還願宣巻の催しを告げる掲示



(写真5) 宣巻人が携えてきた宝巻テキスト



(写真6) 宣巻する「新春班」



(写真7) 洋濱村興隆廟の新しく建てられた舞台で演じる神誕演劇



(写真8) 雨の中、「神誕演劇」を見る木柵張家葑村の村人



(写真9) 阿弥陀仏を念じる年輩の女性たち



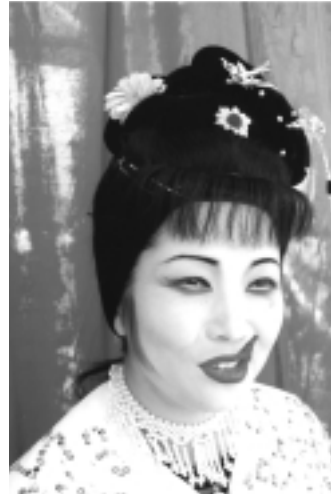
(写真10) 奉納のために米桶に納められた紙銭



(写真11) 宋小青(右側)が演じる鸚哥班



(写真13) 紙銭で飾られた馬と車



(写真12) 「巧姻縁」の登場人物  
口の裂けた花嫁



(写真14) 鬪門鎮石泗村の宣巻風景

# On the Present Condition of Chinese Folk Dramas

Yuko ISOBE

## ABSTRACT

This paper investigates the recent trend towards a revival in the traditional Chinese folk dramas. In regional Chinese society (Shaoxing), various influences on the dramas were analyzed in March and September of 2004. One major result of the study seemed to indicate that seasonal factors did not have great effects on the performance of traditional dramas. On the contrary, dramas were performed all round the year. During the investigation the first thing carefully examined was the background of the dramas performance. It was discovered that, in many cases, main themes of the dramas were related to some kind of a desire for economic advancement. Many times, these dramas expressed thanks for the improvement of local economic conditions while celebrating the rebirth of a local deity.

In Shaoxing, Lianhua Luo, Yinggeban and Baojuan have a high popularity among people in the rural regions. Moreover, the common characteristics in the most popular plays were: (1) The plays were performed at a low cost; (2) the audience could sufficiently understand the folk dramas; (3) the contents or themes of the dramas were easy for the audience to identify with; (4) the dramas contained humour which had a cathartic effect on the high levels of stress experienced in daily life; (5) the actors and actresses were very skilled and, at the same time, strived to fulfil the public's desire for economic wealth and prosperity.